

インフルエンザ の検査・治療

インフルエンザは普通のかぜとは違い、症状も重く、地域の中で大きな流行を毎年必ずおこしてきます。

その場で結果のでる検査薬が開発され、タミフルなどの治療薬も登場して、インフルエンザについての医療は大きく変わりました。

一方でタミフルによるとされる異常行動の問題もあり、治療が難しい場合もあります。



世界の
子どもに
ワクチンを

日本委員会

インフルエンザと異常行動

インフルエンザの患者さんで、急に走り出したりする「異常行動」が問題になっています。とくに転落事故や交通事故にあっけしき、命を落とすこともあるからです。

とくにタミフルを服用後にそのような行動をとることがあるということで、現在は10歳代にタミフルは使用しないこととなっています。

しかしタミフルを服用していなくても同様の行動をおこしていたり、吸入薬リレンザでもおきていたりして、本当の原因はまだ分かっていません。

インフルエンザそのもので異常行動がおきている可能性もあり、タミフル服用にかかわらず、発症後2日間はお子さんと一緒にいて万が一に備えるようお願いしています。



インフルエンザの検査・治療



インフルエンザの検査

A型・B型のインフルエンザ・ウイルスを検出できる検査キットがあります。その場で判定できるので、患者さんの診断や流行の有無を知るために大いに役にたっています。（鼻の粘膜か鼻水を使って検査します。）



インフルエンザの治療

以前のインフルエンザに対する治療は、その場の症状を抑え、合併症を予防する治療が主でした。近年はインフルエンザ・ウイルスの増殖を抑えて、早く症状を軽くし、治してくれる治療薬が使えるようになり、治療法が劇的に変わりました。

抗インフルエンザ薬には内服の**タミフル**、吸入の**リレンザ**と**イナビル**、点滴の**ラピアクタ**があります。いずれもA型とB型の両方に効果があります。

- ・タミフル：1日2回内服、5日間（散剤、カプセル剤）
- ・リレンザ：1日2回吸入、5日間
- ・イナビル：初日1回吸入のみ（5日ほどの持続効果）
- ・ラピアクタ：点滴注射剤（内服や吸入ができない時などに使用）

これらは発熱してから早い時期に使うと効果があります。発症から48時間以内に使用を開始するように求められています。

※以前は抗インフルエンザ薬の使用について議論がありましたが、2009年の新型インフルエンザ発生時には、積極的に使うほうがインフルエンザの重症化を抑えることが分かりました。



登校停止の基準

インフルエンザが発症した日（熱が出た日）の翌日から5日間は登校（登園）停止です。さらに、解熱したあと2日間（乳幼児では3日間）たってから、登校（登園）が許可されます。



インフルエンザに使ってはいけない薬

インフルエンザの小児にアスピリンという解熱剤を使用すると重篤な脳障害（ライ症候群）をおこす可能性があります。そのため**15歳未満のインフルエンザには、アスピリンとその類似薬は使用できません（水痘も同じ）**。

当院採用品では、アスピリンは通常の解熱剤としては使用していません。

解熱剤の中でも**問題がない**であろうといわれているのは、**アセトアミノフェン**（当院採用品：**カロナー**ル、**コカール**、**アルピニー**など）です。

なお、**漢方薬**は問題なく使えます。